

11 シートーク(後半)

< パネリスト >

現田友明 (ワーカーズコープ札幌代表)

丸藤 競 (函館市まちづくり団体活力ユニット代表)

山田貞子 (空知中央いきいき女性ネットワーク くりさわ手造りみそグループ代表)

羽田壮史 (NPO こどもコムステーション・いしかり事務局次長)

現田友明 (ワーカーズコープ札幌代表)



素晴らしいゴスペル歌声の後に、元の調子に戻って非常にやりにくい順番を自ら選んでしまったなという感じがします。

お手元の封筒を見ていただきますと「ワーカーズコープ札幌福祉サービスセンター」「労働者協同組合ワーカーズコープ札幌」と入っております。分かりやすいように一言でいうと、正式名称は労働者協同組合ワーカーズコープ札幌ということで、「福祉サービス

センター」とは何かと言うと、自ら出資し、自ら労働し、経営するというワーカーズコープに、そこまでいなくても自分の持っている力の範囲で何らかの形で仕事に参加したい、という人たちのための会員組織がこの「ワーカーズコープ札幌福祉サービスセンター」ということなんです。

それでは、ワーカーズコープ札幌はコープさっぽろと何か関係があるか？住所はコープさっぽろの本部の中で、コープさっぽろの関連会社や子会社ではないかと言われます。これも答えるのは非常に難しいのですが、一言でいうと「私たちはコープさっぽろ元職員です。目指しているのは福祉の協同組合です。」と答えて、「特にお年よりのために何でもする用意がございます。」とすることにしています。

4点のお話をしたいと思います。

まず、今もお話しましたようにワーカーズコープ札幌の設立経過なんですけど、先ほど池田さんのお話がございましたけれども、あちらとほぼ同じ主旨でつくられたワーカーズコープだと言っていいのではないかと思います。1999年ですので僅か4年前ですけれど

も、NPO法や介護保険法が制定される時期でございました。

私の出身のコープさっぽろは生活協同組合です。生活協同組合で働く労働者は、ワーカーズコープではなく、実はコープワーカーズというのですが、生協労働者にとってリストラなどというものはあるのだろうか？とそれまでは考えておりました。しかし、生協の破綻状況の中で構造改革＝リストラに依りて、自主退社という形でかなりの中高年者が辞めました。

その有志が、協同組合の観点に立って、世の中の役に立つことをこれからの第二の人生として選んでいこうか、ということをつくったのがこのワーカーズコープ札幌、ということです。ワーカーズを除くとコープ札幌ということで、紛らわしい名前を付けるなどと言われることもあるのですが、全く他意はございません。

実際に事業を始めて4年目に入ります。最初の1年間は、出資者が失業保険をもらいながら1年間じっくり勉強、準備をさせていただいて、3年前くらいから具体的な事業の展開に入りました。と言いましても、最初に来た仕事の依頼は草むしりですから、それをやり始めて以来、この4年間で実際にサービス依頼を受けた件数が延べ、2,700件になりました。事業高も何とか黒字、と言ってもまだ税金を払うほどの利益も出ていないわけですが、来年くらいからは社会的に一人前の役割を果たせるような団体に入れるのではないかと思います。

二番目の点ですが、私たちには数多くの依頼があり、多岐に渡るサービスをやっています。協同組合間連帯ということでコープさっぽろの委託事業を受けていますが、我々の本旨はやはり幅広い福祉事業、福祉サービスを

やっていくことです。特に高齢者介護の中で、高齢者の方が自宅で自立して自由な生活を送っていく上でお手伝いとなる事業、これがいかに多いのか、ということを増すことに実感しております。訪問介護、一般生活支援から始まって、いわゆる介護福祉用具のレンタル・販売、電気製品の修理から屋根のトタンの張替え、壁直し、一般清掃、美装、壁クロスの張替え、庭仕事全般、屋根雪下ろしや雪運び、軽貨物の引越などさまざまなものがあります。その中で最も多いのが庭仕事と冬に雪を動かす仕事です。その次に多いのがモノの移動、つまり部屋の中や1階から2階への移動、あるいは不要品の移動(処理)です。三番目に多いのが清掃です。

やはり高齢期に入って自由な自宅での生活を望んでいても、体力の低下で自分ではできないことが増えてきます。これらは、もともと隙間産業と言われてきたジャンルで、便利屋さんやシルバー人材センターが手がけている仕事になるのですが、お年より家庭でお話をしている中で、「いろいろあっても信頼して任せられるところがない、ぜひワーカーズコープさん頑張って欲しい。」ということで、リピーター(お得意様)が年々増えていっています。

働く側がサービスを提供するワーカーズとして仕事おこしをする、ということに止まらず、やはり利用される方のネットワークを、という視点に立って、非営利・協同の立場で、ふれあいのあるまちづくりに貢献し、私たちの存在を社会的に位置付けていく、ということが私たちのビジョンでございます。

今日は学生さんのご参加も多いのですが、ワーカーズコープの経営状態を見ると、収入面で会社勤めの半分とかそういう状況もあるのではないかと、というふうに思います。今

後、30代、40代の子育て世代の方もそこで生活をできる、そういう意味合いのワーカーズコープをつくっていかなければならないだろう、と思います。ただ、20代の方は社会的に見て人件費が60過ぎの人とほぼ同じでしょうから、非常に可能性がある(笑)。ぜひ、今回参加された学生の皆さんは学生ワークスというものも頭に置いてもらえるといいのではないかと申し上げて発言とさせていただきます。

丸藤 競 (函館市まちづくり団体活カユニット代表)



先ほど函館の池田さんからまちづくりの団体から面白い話が聞けるのではないかと、ということがありましたが、面白いかどうかわかりませんが、私は地元のコミュニティFMの「FMいるか」という放送局で番組を持って丸3年半になります。半年事に番組改変があり、必ず1ヶ月前に「もう終わりだぞ」と言われつつながら何とか生き残って2時間ほどの番組を持っています。その威信にかけて

も内容はともかく、時間ちょうどに終わらせることを目標にして頑張りたいと思います。

他の皆さんはしっかりした活動をやっているらしいですが、私どもがやっているまちづくりの活動は、どちらかというほとんど遊びみたいなことばかりです。ライブを開催したり、先ほどのようなゴスペルの公演をやったり、映画祭をやったり、遊びのようなものを通じてまちづくりに関しているいろいろな学んだこともありますし、多少でも仕事につながるようなことを見つけてきたのではないかと、と思いますので、今日はそこら辺の話をして帰りたいと思います。

「混ざる、見つける、楽しむ」この三つが実はまちづくりの一番のポイントじゃないかと私は思いました。

「混ざる」というのは何かというと、いろいろなものが混ざっていかねばいけない、ということです。一番冒頭のところで道庁の方が挨拶されて「行政と市民」とか言われました。全くその通りで、混ざることがまちづくりに一番大切です。社会人と学生が混ざったり、市民と行政が混ざったり、ということいろいろな立場の人が混ざっていくということが、新しいパワーをそこからどんどん生み出す。一つの組織の中とか一つの毛色の中だけでは、どうしてもその色に染まった考え方の中でしたしか発想を呼び起こすことができないんですね。自分たちで「これは新しい考え方だ!」と思っても、周りから見たら大したことない、同じ色の中でただ右か左かというだけです。それより全く違う種類のものが混ぜ合わさることによって、初めていろいろなものができてくる。そうやって初めてまちづくりなのではないか、ということです。

まちづくりのやり方というかセンスというか雰囲気というのを一言でいうと「ドリー

ム・イマジネーション・ゲーム」つまり、夢をイメージするゲームだと思います。まあ、楽しくやろうということです。私は走るのが嫌いですが、高橋尚子さんにとって走るというのは楽しいことですよ。まちづくりもそうで、他の人には苦痛かもしれないけれど自分には楽しいことはたくさんあると思います。だから、その楽しいことをやる。で、そのドリーム・イマジネーション・ゲームの頭文字をとってD.I.G. (ディグ) これは「掘る」とか「見つけ出す」とかという意味があるのですが、少しこじつけになるのですが、まちづくりというのは、確かに見つけ出す、ということです。

自分が住んでいるまちのことというのは意外と知らないんですよ。私は実は30過ぎてから函館に戻ってきたんですけども知らないことだらけで、だいたい函館に住んでいる若い人は「函館の街はつまんない」と言うんですね。それは自分で見つけることをしていないからなんです。札幌は結構大きな街ですので、「札幌はいいよね、楽しいよね」と言いますが、札幌に住んでいるからといって、札幌の全ての楽しいところ、全てのいいところ、全ての魅力を知っているわけではないと思います。だから皆JRタワーに行っちゃうんですね。近所の店の方がJRタワーよりよっぽどおいしいものが売っているのに、わざわざあんなに目立つところに行かなくてもいいんじゃないか。あそこでソバを食べると720円だそうです。これはウチの近所なら500円で食べられるのに…。別に「JRタワーに行くな」というわけじゃないんですよ。私も明日は丸1日かけてゆっくり見に行きますから(笑)。

要は観光ガイドに載っているとじゃなく

て、「あそこには親切なおばちゃんがいる」とか「あそこから見る夕焼けの眺めがいい」とか「あそこには野良猫がたくさん出る」とか「ここの家は庭がすごくきれい」だとか、そういうレベルでもいいので、どれだけ皆さん隣近所のことを知っていますか？歩いていける範囲内のこと、大体15分から20分で行って帰ってくるご近所のことどれくらい知っていますか？ということなんです。多分知らない方が多いと思うんですよ。スキノのどこのお店のどのおねえさんがキレイだということは知っていても、自分の近所の散歩できる範囲の良さというのは知らない。それを見つけていくのがまちづくりのポイント二つ目。

ちなみにちょっと話は変わるんですが、これは私がやっている活動ではないんですが、函館で「スローマップ」というのができたんですね。これは観光名所が載っているんじゃなくて、ここは自然食のレストランです、ここは古い家をそのまま使っているところです、この店はリサイクルに熱心です、ここは生ごみをきちんと処理している生鮮食料品店ですといった内容をアイコンという絵で表している地図です。

三つ目は「楽しむ」。これは先ほども言いましたが、苦痛なことをやらされていると上手いくはずがありません。どんなことでも自分が楽しめるところから入っていくと、今言った「見つける」「楽しむ」といったことがごく自然にできていく。何も難しいことはありません。楽しむことからスタートしていくことが、まちづくりについて私が分かったことなんです。

最後に、仕事おこしの問題に触れたいと思います。函館市の企画部が今年の3月に出した政策情報誌「さわやか函館」に、函館市の

若手の職員 12 人が函館の街をこういふふうにして再生していけばいいということをいろいろ考えた提言というのがあります。彼らが結局考えたのは、コミュニティビジネスを基盤としたまちづくりのシステムをつくっていかねば函館市は再生しない、ということです。その中で成功させるカギというのがいくつか書いてあります。「市職員も市民という意識を持ちなさい」とか「市民こそまちづくりの主役であるという機運を盛り上げましょう」とか「地域の問題解決のためにネットワークをつくりましょう」とかいろいろ書いてあるんですが、先ほど言ったように、混ざったり見つけ出したり楽しんだりということを皆がしていくと、この市の職員の市民としての意識とか、市民がまちづくりの主役であるという機運などが高まってくるのではないかと、思います。

あと 30 秒ということなので、少しだけ宣伝をさせていただきます。FM いるか毎週土曜夜 8 時から 10 時にハコダテ・パワー・ポケットという番組をやっています。0138-23-3100 というのが FAX 番号です。FAX が来ないと番組が中止になっちゃうんですよ(笑)。どんな話題でもいいので FAX 送ってください。函館にお越しの際、土曜日夜 8 時から 10 時にいるようなことありましたら、FM いるかに合わせていただければと思います。ありがとうございました。

山田 貞子（空知中央いきいき女性ネットワークくりさわ手造りみそグループ代表）

みなさんこんにちは。皆さんの前でお話するという機会があまりなく、話し下手ですの

で皆さんの聞き上手にお任せしたいと思います。



この手造りみそは、昭和 63 年にたまたま農協婦人部の役員会の席で、農業改良普及員さんから「これからは農産物の加工というのを何か手がけたらどうですか？」というお話をいただいた時に、同じ役員のメンバーだった 4 名の目と目が合って、出発したというのがそもそもの始まりでした。

それから 10 年間は、農協婦人部の手造りみそということで歩みまして、しかし農協婦人部の方にはお世話にはなっていないくて、農協婦人部の傘の下にいたのかな、と思います。当初は米 15kg 大豆 15kg で四斗桶に約 1 本、みその出来上がりで約 60kg、それを一人 1 本ずつということで 4 本から始めました。それも農家の納屋を借りまして、設備も小さかったので 1 本のみそを炊くのに 3 日はかかります。これを 4 本するというのは大変な労力でした。とてもそれではかなわない、ということでその後は町の公共の加工場を借りて、造りはじめました。しかし、不特定多数の人が出入りする公共の加工場で造ったみそでは、公の場所では販売できないというこ

となんです。

そこで10年を機に先輩方と若い人のメンバーチェンジを行い、その時に若い人たちがとにかく加工場をつくらう、ということになりまして、農家の空家を借り受け、そこを大工さんに入っていたいただき、保健所の認可を取って販売許可も取りました。ちなみに家賃が一年間で2万5千円ということで(笑)、皆さんにお世話になっているのかな、と。たまたま道の補助金もいただきまして、半額は皆さんの出資金でまかなっております。

おかげさまで、イベント等にも出させていただきまして販売をしております。まだ正直言って儲かるとまではいいていません。しかしながら、5名の仲間がいきいきしてやっているというのは素晴らしいことなのかな、と思います。

それから、平成2年に栗沢町で、はと麦を作り始めまして、栗沢の名産としてはと麦茶を作り出しました。その時にお茶を焙煎していただいたお茶屋さんのアイデアで、みそを造ったらどうか、という知恵をいただきました。その時は振興会の方が栽培したお茶の残った分を分けていただいて、ということで始まりました。

初めはいろいろな方法をやったんですが、「おいしいね」というところまではいきませんでした。それから10年目に来た時に、「これは私たち若い人の力で作らなければダメだ」ということで、私たちの仲間でも栽培しています。なかなかはと麦をつくるというのは大変なことですが、今日のテーマにもあるように栗沢町のみそということでまちおこしになったのかな、と思います。

私たちは皆、現役の農業人です。暇を持っている人は一人もないのかな、と思います。仕込みは11月末の農繁期を終わった後、

それから3月末で、今は2トン半ということで量も増えました。夏の間の管理もあるのですが、忙しい時でも仕事が始まる前ということで4時に集合して、6時には帰って朝食をして農作業に携わる、ということで、本当に家族にも迷惑をかけず、生きがいを持ってやっています。しかしこれは、いつまで続くのかなという私なりの不安もあります。

昨年からは、栗沢町の小学校の子どもたちに、安心と本物を食べてもらいたいということでみそを供給しております。今年からは、「はと麦みそ」ということで、栗沢町の子どもたちには本当に安心でおいしいものを食べてもらいたいと思っています。今後は特養老人ホームや町立病院などにも供給できたら、ということなんです。しかしながら量がまだまだ足りないということで、Aコープにも販売予定はしているんですが、ちょっと量が心配で実現していません。しかし、販路もきちんと決めていかなければ、と思います。とにかく、皆さんが農業をしながらみそ造りをするというのは、これはやはり仕事おこしなのかな、と。初めこちらに呼ばれた時には、何で私たちがここに呼ばれたのかな、と疑問にも思ったんですが、ある意味ではまちおこし、また仕事おこしとしてそれなりに意味があったのかな、と私なりに考えています。

とにかく、5名皆が健康で、意欲を持って、将来を眺めて夢を持ってということは、これはいいことしたのかな、と思っています。しかし、みそというのは、今日造って明日売れるものではありません。今日造ったら1年半くらいしっかり寝かせております。そうでなければ販売できません。ですから、今年売るのは去年造っていなければ、来年売るのは今年造ってなければ売れないということで、

あっという間に15,6年が経ってしまい、最近「そんなに経ったのだろうか」と我に返っている次第です。

そんなことで、私たちが米も大豆も全部自分たちの生産物からつくっているということは、やはり誇りになるのかなと思います。それから、儲けはなかなか見えませんが、今後も皆さんに喜ばれ、造っている人たちも楽しみながらいくのがいいんじゃないかな、ということで健康に気をつけて農業とみそ造りの両方を何とかうまくやっていきたいと思っております。

羽田壮史（NPO こどもコムステーション・いしかり事務局次長）



NPO法人こどもコムステーション・いしかり、という名前は長いので、僕らは「コムステ」と呼んでいるのでそう呼ばさせていただきます。

最初、学生でNPOの活動をしている人ということで依頼を受けたんですが、僕は3月で卒業してしまって、学生ということではありません。

まず、僕らの団体であるコムステについて紹介したいと思います。コムステはもともとは石狩親子劇場という任意団体で約20年間やってきました。石狩親子劇場は、会員の会員による会員のための活動しかやっていませんでした。社会的には全くと言っていいほど認知されていませんでした。その中で会員数が10年を節目に減っていった、このままではなくなってしまう、ということで、どうせなくなってしまうなら、社会的に認知され、社会的使命をまっとうできる会にして、それで社会的ニーズがないなら仕方がない、と考えて法人格取得を決意しました。それで、無事今年の10月12日に法人格を取得し、現在もまだ会はあります。

先ほど丸藤さんも「混ざる」とおっしゃっていましたが、コムステの最大の特色に異年齢での活動ということがあります。僕らの活動は子どもをターゲットにしているんですが、子どもといいましても0歳から18歳までいますので、その中で子どもも大人も一緒になって活動することで、子どもも視野が広がり大人も視野が広がるということです。

コムステにとってのミッション＝社会的使命ですが、先ほども言いましたが、こどもたちのために居場所をつくってあげることです。子どもたちを取り巻く問題は、最近さまざまなことが取り上げられています。子育ての孤立化、公教育のひずみ、子どもが自然や生活や文化を体験する機会の不足、子ども自身を支える人間関係をつくるのがなかなかできていない、子どもを人格ある人間として捉える大人の意識の欠如など、例を挙げればきりがありません。こうした問題を一つ一つ解決していったら、コムステが地域への働きかけをもっともっと増やすことで、究極には子どもたちの生活改善を達成させる、す

なわち子どもたちが自由にのびのび自分を表現できて、自分も他人も尊重できて、子どもの笑顔が地域にあふれて、それを見守る大人がいる地域社会にすることが我々コムステのゴールということなんです。それが実現できた時に、コムステの使命が達成されて、役割を終えてなくなるのか、また新たな社会的ニーズが見つけられれば、またそれに向かって走っていくということなんでしょうけれども。

現在、コムステの常勤スタッフの人数は2人です。僕と事務局長で動いているんですけども、2001年の経済産業研究所の調査によると、NPO1団体当たりの事務局スタッフの平均人数は6.3人だそうです。常勤より圧倒的に非常勤が多く、スタッフと雇用契約を結んでいるNPOは3割強だそうです。ちなみに僕らコムステは結べていません。2,3年後には結べるように努力していくつもりです。健康保険や雇用保険に加入しているNPOも2割台ですごく低い現状です。このように、コムステを含めた多くのNPOでまだまだ労働環境が整っていないのが現状です。

行政や企業から来る委託費や補助金は、個別の事業に対する費用がほとんどで、事務局経費や人件費に回すお金はまた別に捻出しなければダメだ、となっています。僕もその一人なんですけど、NPOで働くことへの期待の裏側には、現実という高い高い壁が立ちまわっているんです。この期待と現実の大きな落差、それから零細組織につきものの資金難と人材難という悪循環があり、これらが日本のNPOがこれから解決していかなければならない課題かな、と思っています。

その課題を解決するにあたり、行政や企業の間隙市場を開拓して、それを育てるアイデアを持って、企画力と行動力のある人材育成

が必要不可欠になってくると思います。その他にも、寄付税制の充実やNPO向けの融資制度も必要だと思います。

コムステもこれからより一層努力していきたいと思っていますので、ご支援のほどよろしくお願いいいたします。

特別発言（まとめ）

菅野正純（日本労働者協同組合連合会理事長）



今日は大変楽しく有意義な集會に参加させていただきまして、大変ありがとうございました。

司會の田淵先生が最初におっしゃいましたように、政府は権力を原理とし、企業は営利を原理として行動している。それに対して市民社会の人々、組織は人と人とのつながりと、かけがえない役割の發揮ということを原理として行動しているのではないか、という主旨だったと思います。

堀内ILO駐日代表は、グローバル化の中で